



Dragon



Atlantis



Kraken



Flying Dutchman



～序章～

Prologue

あなたは、この前
濡れた雨について
どれだけのことを知って
いるだろうか。

水は世界中を巡り、様々なことを経験して、
ようやく雨となる。

岩や大地に染み渡り、時には樹木の幹を駆け
上がり、大海原の一部に、流れる運河の水流
に、また小川のせせらぎへと姿を変え、やがては
分厚い雲となり、ようやく天の蛇口から滴り
落ちるもの…。
それが、雨である。

さあ、雨を巡る旅に出よう。

--この地区を、新たなる世界
を切り開く若き細人に捧ぐ--

《はじめに》

「世界は眠っていた。何の音もせず、何も動かず、何も育たなかった。
動物たちは地中で眠っていた。ある日、虹蛇が目を覚まして地表
に出てきた。虹蛇は、行く先を渡るものを押しのけながら進んでいた。
国中をさまよひ、疲れると、しぐらを巻いて眠った。虹蛇は、そうやって
自分の跡を残していた。全ての土地を這った後、虹蛇は元の場所
へ戻り、蛙を産んだ。やがて蛙たちの腹は水で膨れだした。虹蛇が
気づくと、蛙は笑った。すると、蛙の口から水があられてきて、虹蛇が
這った跡を満たした。こうして、川と湖ができた。その後、草木が
生えはじめ、大地は生命に満ちていった。」

—シオワンの族に伝わる物語—
印

サンテリトリーにあるキカリノ渓谷に住む
者である。この話に登場する虹蛇とは
か崇める大蛇のことで、水と生命の象徴

循環を忠実に再現しているという点だ。
光を使って光合成をする植物が出て
食動物が出現し、当然それらを狙う

が生え、大地が生命に満ちていくのだ。
水が無ければ何も生まれないと

を聞き、小川となり、動物たちの飲み水
源となり、水草や淡水魚を養う。流れる
自然の景観を創り出す。そして、水は
蒸気となり雲になるのである。
てあり、水が無い世界など眠っている

に「H₂O」で済ませられてしまう水たか、よく
るはずである。

らの未来へ

る。



日安は

～序章～

Prologue

《はじめに》

世界は眠っていた。何の音もせず、何も動かず、何も育たなかった。動物たちは地中で眠っていた。ある日、虹蛇が目を覚まして地表に出てきた。虹蛇は、行く先を遮るものを押し分けながら進んでいた。目をこぼし、疲れると、土を巻いて眠った。虹蛇は、そうやって自分の跡を残していた。全ての土地を這った後、虹蛇は元の場所へ戻り、蛙を産んだ。やがて蛙たちの腹は、米で膨れだした。虹蛇が大笑し、蛙は笑った。すると、蛙の口から水があらわれて、虹蛇が這った跡を満たした。こうして、川と湖ができた。その後、草木が生えはじめ、大地は生命に満ちていった。

—シャオワン族に伝わる物語—

この話は、オーストラリアのノーサンタリーにあるキカリン溪谷に住むアボリジニたちに伝わる伝説である。この話に登場する虹蛇とは、オーストラリアやアフリカの各部族が崇める大蛇のことで、水と生命の象徴とされている。

このおもしろい点が、生命循環を忠実に再現しているという点だ。最初、水があり、水と光を使って光合成をする植物が出てくる。次にそれを食べる草食動物が出現し、当然それらを狙う肉食動物が現れる。

つまり、水があれば草木が生え、大地が生命に満ちていくのだ。逆を言えば、水がなければ何も生み出せないということと同じなのだ。

水は、雨になって大地を潤し、小川となって動物たちの飲み水となり、また、ある時は大河となって水草や淡水魚を養う。流れる水は岩をも削り、様々な自然の景観を創り出す。そして、水は池や湖、海へと流れ、水蒸気となって雲になるのである。特に、水は生命のゆりかごであり、水が無い世界など眠っているのに等しい。

化学の授業では、ただ単にH₂Oで済まされてしまう水だが、よく見るとたくさんの発見があるはずである。

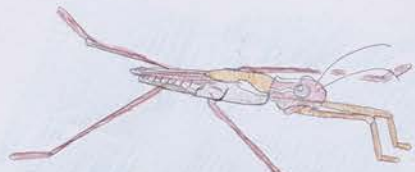
そからの未来へ

はれる。

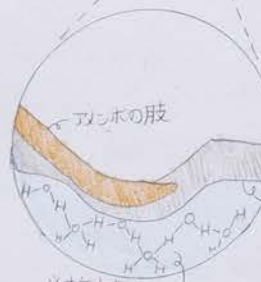


木田安は

重力生物 animal



{アメンボ科}
(Gerridae)
別名: 川蚊蜘蛛



地球上の生物の中で、アメンボ科の昆虫はほとんど水を上手く活用しているものは他にいないだろう。それぞれに役割があり、短い前肢は獲物を捕らえ、中肢は水上での推進力を生み出し、細長い後肢はアメンボの体重を水面の広い範囲に分散させている。体には水をはじく細かい毛がたくさんついており、表面積を増やして浮いている。水面

しかし、この昆虫が何れも評価できる点は、水そのものの方に、分子間の特殊な強い結合(水素結合)があるという特異な性質に着目した点である。水の強い分子間力があるからこそ、この昆虫は、水と空気の境界で生きていくことができるのだ。

味とこれからの未来へ
星、と呼ばれる。
かに
とこ
か思

生まれた時から

性格家柄一
もかも。
雨はみんなに

里人にも黄色
富める人
人も。
まて一

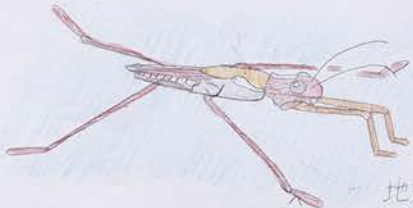
降りそそぐ。
植物も一

愛しあわなけ
雨も、悲しみに
ていこう。

る盗
喜し疾
に変わるまで。

相妻とは、雷のごとであり、雷が夏の季節であるのに対し、相妻は

重カ物 animal



(アメンコ)
(Gerridae)
別名)



地球上の生物
ほとんども水を上手く
いないだろう。
それぞれの肢は
短い前肢は推
水上での推進。
後肢はアメン
広い範囲に水
体には水をは
ついており、表面
水面
しかし、この昆虫が
水そのものの方に
結合(水素結合)
管に着目した点で
水の強い分子間力
は水と空気の境界で
のだ。

意味とこれからの未来へ
星、と呼ばれる。
か思

人は、皆生まれた時から
全て違う。

--顔、性格、家柄--
まで、何もかも。
けれど、雨はみんなに
降りそそぐ。

--白人にも、黒人にも、黄色
人種にも
から、皆しい
子供や大人
全てのものに、降りそそぐ。

--動物も、植物も--
だから、みんな愛しあわなけ
ればいけない。

--怒り狂った雷雨も、悲しみに
満ちた豪雨も--
少しずつ変えていこう。
いつか、その目から、溢
れる雨が、嬉し涙、
に変わるまで。

相妻とは、雷のことであり、雷が夏の季語であるのに対し相妻は



重カ物

animal

～人々の暮らしと雨～



昔から人間は様々な面で
雨を活用してきた。
水車は人類史の中でも
最も古い「雨活」の内の
1つである。

水車とは川などの水流の
力にて回転する原動機の一
種。

紀元前2世紀ごろ小アジア(テトリア半島)
で発明されたといわれている。

《おわりに》 ～『雨活』の本当の意味とこれからの未来～

私たちが住んでいる星はしばしば「水の惑星」と呼ばれる。
しかし、テレビなどで見る地球の姿は、まさに「青い星」そのものであり、
液体の水に満たされた奇跡の星なのだ。と、つくづく感じさせられる。
しかし、今回この『雨活』を通して、この星は自分が思っていた以上に水が豊富
なのだと思えた。

思えば、私たちは水の中でしか生きていけない。
例えば、大気—水蒸気や雲—において水は含まれている。
大気圏を超えた世界—つまり、宇宙空間—では生きていけないのだ。
私たちが水でできた水木層の中でしか生きられない、ひ弱な存在なのだ
だろう。

「カ行理論」の観点からすれば、人間は地球によって生かされている
とも言えるかもしれない。

しかし、最近はどうやら人間たちは少し傲慢になり過ぎており、その支配者
なのかということか分かっていないようだ。
母なる自然には、現れないのである。

それはその昔、本当に人類が自然を支配しようとした。
けれどもそれはそんな世界を、自分の首を絞めている愚かたで滑稽な人を見つ
める目で見えよう。

ある時々の日本では、雨には様々な名称があるということを知らる。
例えば「真雨」とは、強烈(にわか)の雨のことであり、自ら見えることからそう言われている。
また「静雨」は、読んで字の如く静かに降る雨であり、「驟雨」とは、雷を
伴った雷雨のことらしい。

「愁雨」、というものもあり、これは寂しい思いをする雨のこと。「愁雨」は人を悲し
ませるような雨など、一挙げれば千利かない程の名称がある。
これを見ると、昔の人がいかに雨を感じていたか—視覚、聴覚、嗅覚、更には
情緒までも感じとっていたか—が分かるだろう。
いつからであるのか、人々の雨が降っていても、ただ単に「ああ雨が降っている。」
と言っただけになたのは、
しかし、中には同じ物質でできているのだから、雨に遠いななどない
だろうと、懐疑的に思われる方もいるかもしれない。
では一度「稲妻」について考えてみよう。

稲妻とは、雷のことであり、雷が夏の季語であるのに対して稲妻は

重



～最終章～

Epilogue

表紙の地図に描かれている生き物たちをあなたは知っていただろうか？
これらは、現在では小怪物と呼ばれているものたちである。彼らは、その昔には生きていたと言えは「あなたは驚くかもしれない。

しかし、実際に繁栄していた時代があったのである。よく、中世の古い地図や海図を眺めていると、見慣れない生き物が「必ず」と言てよいほど「描かれていることに気づくだろう。

それは、彼らが昔に生きていた証拠であると同時に、今でも私たちの好奇心を掻き立ててくれる。

昔の船乗りにとって、海は恐ろしい場所であり、また見ぬ未開の島や大陸は命懸けで行く場所であった。

当然、不安な気持ちが襲ってきたであろうし、海に對して畏怖の念を抱いていたことだろう。

そのような人々の恐れや不安が、このような小怪物を生んだのであろう。

しかし、最近はどうの世界地図を見ても小怪物は一体も描かれておらず、逆に「見ているこちらが不安になっていくほど」である。

もはや、彼らは絶滅してしま、たのであるか？
自然の恐ろしさか形となて現れたものか
なくな、た今、誰かそれを教えてくれようか。
僕はもうすぐ途絶えようとしている彼らの
存在を知ってもらうべく、この地図を描いた
のである。

金重 文殊
Kaneshide monju





Genesis



Nautilus



Baobab



Dragon tree

Exodus

